

---

# 初恋葬送

在庫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋葬送

### 【Nコード】

N1116D

### 【作者名】

在庫

### 【あらすじ】

新興国であるアクロス王国は歴史や格式が欲しかった。内陸国であるルフド帝国は他大陸との貿易のための港が欲しかった。山脈を介して隣り合う両国の思惑は一致して、子度同盟を結ぶこととなった。同盟の証として、アクロス王国王子アーサーの元に、ルフド帝国皇女が嫁ぐ。しかし、王子と恋に落ちたのは皇女ではなく皇女付きの侍女だった。（現在1話から書き直し中/第3話更新20103、28）

## 登場人物

### アーサー・アクロス

アクロス王国第二王子。金髪に碧眼の青年。

長兄の死により、王位と継ぐことになる。

隣国との同盟の証として政略結婚をさせられてしまう。

自分勝手に考えがちで、短気でキレやすい面がある。

政務もさぼりがちだったりするが、国民のことを想う心もちゃんとある。

### ルル

ヴァイオレット皇女付き侍女。

皇女の輿入れに伴いアクロス王国入り。

### ヴァイオレット・ルフド

アクロス王国の隣国、ルフド帝国の第六皇女。

アーサーの政略結婚の相手。

世にも珍しい黒髪と瞳をしている。

- - - - -

### フレデリック・ヘイゼル

ヘイゼル公爵家の三男坊で、若き青年将校。

いつもへらへらとしていて本性は掴みにくい。

女性のストライクゾーンは広く、女好きで遊び人。

ローレン・ソーマッド

ソーマッド公爵家の出身。アーサーの政務補佐官。

アーサーが仕事をさぼった時などフォローに追われている損な人。  
トレードマークはのんきな笑顔とあっけらかんとした口調。

グラデイス・アクロス

アクロス王国国王。ダイアン、アーサーの父。

政略結婚をアーサーの同意なく強硬に押し進める。

小国だったアクロス王国を大陸屈指の強国に押し上げた名君。  
数年前の領土拡大の戦では、何度も視線をかくぐってきた。

マリアンヌ・ヴァン・アクロス

アクロス王国王妃。ダイアン、アーサーの母。

ターナー・ヘイゼル

ヘイゼル公爵家当主。フレデリックの父。

元老院構成メンバー・大臣の職にもついている。

エリザ

宮廷内の侍女を取りまとめている侍女頭。

帝国の侍女たちの指導にあたっている。

働く姿は「使用人の手本」と評されるほど。

- - - - -

ダイアン・アクロス（享年18）

アクロス王国第1王子。アーサーの兄。

本当ならダイアンが王位を継ぐはずだった。

五年前、国民には「病死だ」と御触れが出された。

レナ

アーサーの夢に、ダイアンとともに出てくる女性。

## 第1話「同盟の証」

初雪の降る季節がまた巡ってきた。枯れ果てた木々がこれからの厳しい寒さを予感させる。

彼が眠りについた日も、乾いた風が頬を痛め、雪が静かにしんと降り続いた。

宮殿の奥深く、王族のみが住むことを許された贅の限りをつくした部屋に、彼は彼女と一緒にベットの上で静かに眠っていた。寄り添いながら眠る二人の姿から、ずっと俺は目を離せなかった。

どうしてこんなことが起きてしまったのか。幼かった俺には分かんなかったが、王の言った「……愚かなやつよ」という一言が妙に心に引かった。

翌朝、国民に対して王は御触れを出した。

「アクロス王国ダイアン王子、病死」

もう、五年前の出来事になる。

幸せそうに横たわる二人の姿が、未だに瞼に焼きついてはなれない。

今日も王に呼び出された。「立場を理解しろ」とか「遊びも止める」とか、説教される内容はいつも同じだ。

俺が好き好んでやっていることは、王にとっては眉をひそめることばかりのようだ。

だいたい、あの親父は考え方が固いんだよなあ。考えると面倒臭くなつて、いっそサボろうかと来た道を戻ろうとした時、タイミングよく大臣のターナーとばったり出くわしてしまった。

「げっ」

「『げっ』とは失礼ですぞ」

「なんでもねーよ。じゃーな」

「玉座の間はそちらではなく、あちらで御座いましょう」

軽く挨拶をしてそのまますれ違おうとした瞬間、ターナーに左腕を掴まれる。彼はそれはいい笑顔で俺の歩いてきた方角を指差した。

「これから、フレデリックと遠乗りにも行こうかなーと……」

「アーサー殿下、陛下にお呼ばれではないのですか？」

「っんだよ。いつもなら見逃してくれるじゃねえか」

いつもならターナーやほかの家臣に出くわしても、「また、お逃げになるのですか」と声はかけられるが、彼らは俺の行動を微笑ましそうに見逃してくれるのに。

「陛下からの大事なお話がございます。今日は逃げられませんぞ」

ターナーは眉間に皺をよせ、真剣な面持ちでそう言った。何か、大事でもあるのだろうか。ターナーの態度を見るとどうしても左腕からターナーの手を振り払うことが出来ず、そのまま玉座の間へと連れて行かれたのだった。

重々しい玉座の間の扉を、近衛兵が二人がかりでゆっくり閉めても、ドンツと大きな音が廊下中に響き渡った。

この扉は王によく似ているなと改めて感じる。扉は王を守る最後の砦としての役割上、飛びぬけて強固な作りになっている。頑丈すぎる硬さは王の頭の固さに負けず劣らない。

俺をここまで連れてきたターナーも、廊下に下がっている。

玉座の間にいるのは王と俺だけ。

王 名をグラデイス・アクロスというこの男を、俺はどうも好きにはなれない。大陸の小国に過ぎなかったこの国を、大陸有数の強国へと申しあげた猛者。外交内政において非凡な才を発揮し、国民からの信頼も高い名君、らしいが。

それでも、気に食わないものは気に食わないのだ。

「んで、子度は何用で？ いつもの小言なら勘弁して頂きたいのですが」

さつさと終わらせた俺は玉座に座っている王に今回の要件について質す。王はすぐには答えずに、自身の豊かな顎髭を手で撫でながら、何かを思案している。

過去の領土拡大の戦いにおいて、幾多の死線をかいくぐってきたこの男の存在感は圧倒的である。その大きすぎる存在感を持つ彼に怯えずに対等に渡り合える強者ははたして何人いるだろうか。

俺の間から少し間を空けて、王が口を開いた。

「アーサー、いくつになった」

「何を突然……、冬を越えれば十八になります」

「そうか。 冬を越えれば十八となるか」

王が一瞬、目を細め俺を見た。その瞳に宿すのは哀愁か、愛執か、それとも別の何かか。

しかし、ほんの一瞬のことで、俺は特に気にするでなく、再び厳格な瞳に戻った王の次の言葉を待っていた。

「帝国との間に同盟を結ぶことに相成った」

「ルフド帝国と？ また急な話で」

「急な話ではない。数年前から南の国境線は帝国と接しておるし、



昨今他大陸との貿易はより重要性が増しておる」

「内陸国である帝国は港が欲しい、新興国であるわが国は後ろ盾が欲しい、って所ですか」

「後ろ盾ではないが、他国を黙らせるくらいの格式や権威は必要だろう」

「で、その同盟と俺に何の関係が？」

「帝国皇女とお前との婚姻を同盟の証とする」

「……はっ？」

何を言った。この男は。

「帝国皇女とお前の婚姻が決まったと言った」

婚姻？ 俺が、帝国皇女と結婚？

「ふざけんな！ 俺の見知らぬところで、そんな下らないこと決めやがったのか！」

「何が下らぬ。同盟の証としての婚姻ぞ」

「その同盟の証つてのがどうしても必要だつっても、俺以外にも王族はいるだろ！」

「相手は帝国の皇女。お前以外では相手にならん」

「婚姻がないとダメな同盟なんて結ぶな！」

「口を慎め。同盟は破棄せん。お前と皇女は婚姻する。以上だ、下がって良い」

「なっ！勝手に話を終わらせんなっ……！」

玉座に座る王に向かって飛びかかろうとすると、いつの間にか玉座の間に入ってきた近衛兵達に取り押さえられる。たとえ訓練した近衛兵だとしても二、三人くらいならば振り払えるが、六、七人に取り押さえられてしまえば、この俺でも王に近づくことは出来なか

った。

「離せ！！」

「殿下、落ち着いてください！」

「なりません。お氣を確かにお持ちください！」

兵達が俺を取り押さえるのを見ながら、王は「要件は済んだ。下がらせよ。」と命じるだけだった。兵達に引きずられながら、王を睨みつけ情けなく叫ぶしかなかった。

「俺は結婚なんてしねえ！」

「婚姻を無効にしたいねー、無理無理」

フレデリックは遠慮の欠片も感じられない言葉で一刀両断した。

「……お前に話した俺がバカだった」

「君はもともとバカだろう。それに、君が考えるほど結婚は悪いものじゃないと思うけどなー」

ケラケラとフレデリックは笑っている。他人の不幸は蜜の味とまではないかなだろうが、ことの事態を楽しんでいるのは確かだ。なぜこんな奴が親友なのかと自分自身に問いただしたくなった。

「結婚、というよりは好いた惚れたっていうこと自体が嫌なんだ」

どうしてそんな馬鹿げたことの代表例である結婚を、俺がしなければいけないんだ。俺がそう主張すると、フレデリックは目を見開

き、飲んでいた赤ワインのグラス 俺の部屋に保管していた赤ワインを勝手に開けた をベッド脇のサイドテーブルに置き、それはそれは大げさな仕草でため息をつき頭を抱えた。

「アーサー、君はバカだと常日頃思っていたけど、ここまで重度のバカだと思わなかった。いいかい？ 恋愛というものはね、神が我々に与えられた最も尊いものなんだ。誰かを愛しいと想い、さらに愛しい人から愛されるのならば、これ以上の喜びと幸せはこの世にない。僕は断言するね！」

「お前がそんなことを言っても説得力無え」

「何故？ 僕ほど愛に飢えている男なんていないだろう」

「じゃあ、今、そのお前の『愛しい人』は誰だよ」

「シンディ嬢にミレーナ嬢、エイリーン嬢、オリビア嬢に」

「もういい」

いつものことながら、こいつの女遊びの激しさには呆れてしまう。

「ゲーム感覚で女と遊んでる奴が何を言ってるんだよ」

「酷いね。ゲーム感覚だなんて。僕は誰とでも本気」

フレデリック口角を上げ、心外だなと言わんばかりに大げさに肩をすくって見せた。けれど、こいつはそんなことこれっぽっちも思っていない。こいつはそういう奴だ。

「何、アーサーは女性が嫌いなのかい？」

「そういうことじゃねえ」

「……アーサー、いくら僕が美しいからと言って、男に走るなんて……！」

「んなことあるかつ……！」

よよよつとわけのわからない言葉を発しながら、人のベツトに腰かけるフレデリックを見て、本当にどうしてこいつが親友なのか頭が痛くなった。

「冗談に決まってるだろ、そう怒鳴るなよ」

「言つていい冗談ではなねえだろうがっ！」

「しかし、君の妻になるだろう女性は気の毒だね。愛のない結婚ほど空しいものもない」

「王族や貴族に生まれた以上、ありきたりなことだろ」

王族や貴族といった上流階級は生まれれば、家同士の利害関係で結婚することになるのは当たり前。フレデリックのように自由に恋愛を楽しむことは出来ても、結婚となれば話は別になる。このご時世「愛のない結婚」はごく普通のことだ。

「おやおや、君はちゃんと理解しているんじゃないか」

「何を？」

「王族に政略結婚はつきものだってことをさ」

「……！！！！」

「やっぱり、アーサーはバカだよね。」

完全に自分で自分の首を絞めてしまった。そう、王族に政略結婚はつきものなのだ。

それは心の底では理解はしている。それでも、結婚なんてしたくない。矛盾した考えだと溜息が出そうになる。

「とつとと諦めることだね。それより、君の花嫁は異国から来るんだろう？ 何も知らない国に愛のない生活。切なすぎるね」

「ああ？ もう相手のこと知ってるのか？ ……お前、俺が話す前から結婚の話知ってたな？」

「まーね。と言つても、僕だつて知つたのは昨日の夜」

「ターナーから聞いたのか」

「そう、父さんからね」

「てえことは、元老院もこの話は承諾してる？」

「ピンポーン。君に逃げ道なんてないってことさ」

フレデリックの言葉を聞いて、今度こそ溜息をついてしまった。

「君に相手の女性のことを詳しく聴こうと思つてね。君の部屋を訪ねたわけ」

「別に来るのはいいが、人のワインを勝手に開けたり、くつろぎすぎだろ」

「まあまあ、僕と君の仲じゃないか。そんなことより、相手の女性はどうな方なんだい？」

「…女性っつーかなあ」

ルフト帝国第六皇女、ヴァイオレット・ルフト。ルフト帝国で正妃の子供は彼女だけらしい。年は俺より年下の十一歳。女性というより、まだ少女だ。幼い年齢とは裏腹に教養が豊かで珍しい黒の髪も持つ見目麗しい少女だとターナーから聞かされた。

「十一歳ねー。ちょっと僕の心には響かないかな」

「別に響かせる必要もねえだろ」

「将来有望そうで良かったじゃないか」

「俺には関係ねえ」

「ふーん。まあ、女が嫌いじゃないなら、ヴァイオレット皇女とも適度に上手く付き合うことだね」

フレデリックは残っていた赤ワインを一気に飲み干すと、部屋を出て行った。皇女が妙齡の女性じゃないことがお気に召さなかった

ようだ。

俺は一人、舌打ちを打った。酒を飲みたかったのに、フレデリックにすべて吞まれてしまったようだ。ベッドに倒れ来ぬように寝ころんだ。

何が恋だ、愛だ、結婚だ。そんなものいったい何になるというのか。

瞳をゆっくりと閉じる。今でもまぶたの裏には、あの日の光景が鮮明に残っている。

白い雪が静かにしんと振り続けて、あたりは一面真っ白だった。雪がすべてを包んで世界中が真っ白になって、何もかもが純粹にきれいなものになっていきそうな、そんな日だった。なのに、そこに広がっていたのは悲しくて、切なく、愚かな光景だった。

天井へと手を伸ばした。

高すぎる部屋の天井と到底届きそうにない俺の手は、彼が必死になって掴みとうとしたのに掴めなかったものと同じなのだろうか。

柄にもないことを考えて、俺は自分自身が可笑しかった。

## 第2話「懐かしい夢と初雪と逃れられない現実と」

東の宮は先代の王が妻のために造らせた建物だ。王宮の隅にひっそりと佇む東の宮は、随分前に宮の主が亡くなってからというもの人の手が入らなくなってしまうた。生前、主が愛し丁寧に世話していたという色とりどりの花は今では乱雑な野原のように成り果て、整えられていた庭園の美しさはとうに消えさっている。

お目付役の目を盗み、自分のお腹くらいまで長く伸びた花々を生懸命かき分けて、俺は東の宮へと通う。

深い草木に覆われた東の宮の裏側の城壁。そこには小柄な人が一人や々と通れるくらいの小さな抜け穴があり、そこから王宮を抜け出し城下へと遊びに行くのだ。

城壁を抜けると王宮の裏にある小さい森に出て、すぐ傍にあるけもの道をたどっていけば子供の足でも二十分ほどで迷わずに城下へと行くことができる。けもの道はいつしか砂利でできた簡易な道となり、視界には城下の外れにある赤い屋根の小さな教会が見えてくる。

教会のドアから見知れた人影が二つ顔を出すのが見えた。

ずっと坂道を下ってきた疲れなんてすっかり忘れて、俺は赤い屋根の小さな教会へと走り出した。

やっと、追いついた。二人して俺を置いていくなんてずるいんだから。

砂利で転びそうになっても立ち止まらずに手を振りながらその人影に向かって大きな声で呼びかけた。

「兄上ッ…レナッ…！」

声を挙げながら、ベットから飛び起きた。

呼びかけた声が空気の中に散っていく。

しばらく頭の中が混乱したが、ゆっくりと思考が現実へと帰ってくる。

薄目で視界を右から左へと動かせば、東の宮を囲う花々も、森にあるけもの道も、城下の外れにある赤い屋根の小さな教会も存在しない。ベットサイドのテーブルには空のワインボトルがあり、机の上にはまだ片付いていない仕事の書類が束になって置かれている、王宮内にある自分の部屋。

「夢か」

額から一筋の汗が顎へと流れた。寝ている間に大量に汗をかいたようで夜着がぐっしりと濡れている。

「気持ち悪いなあ、おい」

肌に纏わりつく夜着の感触も、後味の悪い目覚めも。

「  
気持ち悪い」

視界を覆うように両手をかざし、ため息ともに今の重い気分を吐き出した。

自分を落ち着かせるように静かに深呼吸を数回繰り返す。  
久しぶりに夢を見た気がする。何度見ても、最悪だ。

「くそつ、王がくだらねえこと言い出すから。……喉かれて痛え。」

喉がカラカラに渴いて独り言を呟くたびに微かな痛みを感じる。  
サイドテーブルの上、空のワインボトルの隣に置かれている半透



明の小さい呼び鈴を手にとって軽く振る。リインと甲高いガラス音が部屋に響く。

「お早う御座いますアーサー殿下。お早いお目覚めのようですね」

部屋の扉の向こうで控えていた侍女たちが呼び鈴を合図に部屋の扉を開けた。皆、部屋に入る前に深々と頭を下げ挨拶をしてから、各々の今日の仕事に取り掛かっていく。

扉をあけると同時に俺に話しかけてきたのは、侍女頭を務めるエリザだった。

「あー、お早うエリザ。悪いんだけど、喉が渴いた」

「左様でございますか。只今」

部屋のソファの上に今日俺が着る服を用意していた侍女に、飲み水を厨房から運んでくるようにとエリザが声をかける。

その侍女が足早に厨房へと向かっていったのを見届けると、エリザは大窓のカーテンを素早く開き、窓を目一杯開けると部屋に朝の澄んだ空気が部屋にそよいでくる。

大きく開かれた窓から注がれる太陽の光に俺は眉をひそめた。

「エリザ、眩しい」

「朝の光を浴びて、しゃっきりなさいませ」

エリザは俺が言った文句をピシャリと却下した。

齢五十を当に超えている彼女は今日もグレーの髪をぴっちりまとめ上げ、黒を基調とした足首ほどまであるロングスカートの侍女用の服を身につけている。

使用人の見本と評される彼女は、いつも表情を変えずに淡々と仕事をこなす。

「あら、初雪ですね」

エリザが窓の外を見てポツリと呟く。

「まあ、本当に」

「本格的な冬の到来もすぐそこかしら」

エリザの独り言を耳にした侍女たちも一旦手を止めて外を見ている。

ベツトから立ち上がると大窓の前まで行くと、俺も外の景色を眺めた。

薄い灰色の雲が空を覆い、そこから雪がゆつくりとゆつくりと地面に落ちていく。初雪は大抵積もることなく、地面に触れた瞬間に消え去ってしまう。そのせいでこの季節の地面はいつも水分を含みぐちゃぐちゃとしている。

「すげーすげー！ 雪だっ！」

「おーゆき、ゆき」

「雪合戦！ 雪合戦しよーよ」

そんな地面なんかお構いなしなのか、おそらく王宮に仕える使用達の子供が数人、元気に外を走り回り「雪だっ！雪だっ！」とはしゃいでいる。

ほほえましい光景に、外を眺めていた侍女たちがクスクスと小さく笑っている。

「さ。外ばかり見ていないで、仕事を再開しますよ」

パンパンとエリザが手をたたくと、侍女たちがあわてて止まって

いた手を動かし始まる。ある者は洗顔の用意、ある者は昨日俺が少し散らかした本棚を整頓している。エリザを含めた五人ほどの侍女ができればきの朝の仕事をこなしていく。

俺ははまだ夜着を着替えたり洗顔をしたりすることなく、外で遊ぶ子供たちをじっと見つめていた。

あーあ、気をつけろっていったのに。何やってるの、アーサー。

足元ぐしゃぐしゃで滑るんだよ。

だから、危ないって注意したんだよ俺は。言い訳しない。

手厳しいのですね、ダイアン様。アーサー様は初雪が嬉しくて仕方ないですよ。

なっ！別に雪が降ったからって、はしゃくほど、もうガキじゃねえよ！

はいはい、そういうことにしておくよ、アーサー。背伸びしたい年頃になられたのですね、アーサー様。兄上ッ！レナッ！何だよ、その言い方！

「殿下、お水をお持ち致しました」

「ッ！！」

「……？ 殿下、如何なされました？」

「いや、なんでもない。水貰うわ」

さきほど厨房に向かっていた侍女が飲み水を持って部屋に戻ってきたらしい。

いつの間にか物思いにふけていた俺は、侍女に声をかけられるまで、まったく彼女に気づくことは出来なかった。

侍女から飲み水を受け取ると一気に喉に流し込む。カラカラだった喉は待ちに待った水分に歓喜を挙げる。

しかし、水を飲んでも引きずられるような気だるさを取り去ることはできなかった。

空になったカップを侍女に渡すと、もう一度窓の向こうの景色を眺める。

きれいだね、と雪を振る様子をじっと眺める子供たちを見て、クツと自虐的な笑いがこみ上げてきた。子供たちのその姿は、五年前までの自分そのものだった。

昨日、王から伝えられたことを冷静に考える。俺の結婚云々はとりあえず置いて。

わが国アクロス王国と隣国ルフド帝国との同盟。

大陸有数の強国となったアクロス王国だが、その歴史はまだ浅い新興国。対するルフド帝国は大陸随一の歴史を有する伝統のある国であるが、海に面していない内陸国。他大陸との貿易が重要になってきている昨今、港を有していないルフド帝国は他大陸との貿易で、他国より一歩遅れている状況がある。

内陸国であるルフド帝国は港が欲しい、新興国であるわが国は歴史や格式が欲しい。

数年前の領土拡大によって、南の国境線はルフド帝国と接している。大陸」と評される強固な陸軍、恵まれた天然資源を持つルフド

帝国と正式な和平が結ばれば、軍の負担も大幅に軽減されるし、鉾石の輸入も今よりは容易になるはずだ。

特に良く燃える石炭は、厳しい冬を過ごすのになくてはならない必需品である。出来るだけ多く確保したいのが本音だ。

「ルフド帝国との同盟自体は、願ってもねえことなだけどな」

けれど、それに自身の結婚が絡んでくれば、両手を挙げて歓迎することなんてできるはずもなく。

「確かに、今まで犬猿ってほどではありませんでしたけど、交流は廃れてましたからねー。これを機に海上貿易だけじゃなくて、大陸内の商いも手広く出来る良い機会になるかもしれないじゃないですか？　なんてったって、わが国の基盤は商業ですからね」

執務室の本棚からルフド帝国に関する資料を探しながら、あっけらかんとした口調で補佐官のローレンが言葉を返してきた。

ローレンは、ルフド帝国に関する目ぼしい資料を集め終わると、書類に追われている俺の目の前に荒々しく資料を置いた、というよりは手を離して落としたというほうが正しい。

ドンツと勢いよく資料が数センチ上から落ちてきて、拡げられていた書類が机の上で無造作に散らばった。

「おい。もっと丁寧に扱えよ」

「気が向いたらー」

「……」

振りむくことなく返事だけをして、ローレンは執務室の脇に用意されている自分用の机へと戻っていった。

ローレンにしろフレデリックにしろ、どうして俺の親しい奴って

こつも適当な振る舞いをするのだろうか。昨日も昨日でフレデリックには勝手にワインを飲み干され、鼻で笑われ、「君は本当にバカだよ」と呆れたように言われた。

「……………あのですね、フレデリックも言っただと思うんですけどねー。一家臣としましては、政略結婚の回避は難しいとしか申し上げられないですよ」

「王の決断に元老院も賛成したからか？」

「それもありますが、今回の同盟の申し出、特に皇女との婚姻の件は帝国から申し出たこと、帝国側が差し出したのがヴァイオレット第六皇女っていう二点の方が最大のネックですね。」

「……………帝国側からの提案だったのかよ」

昨日、玉座の間では知らされなかったことをローレンは簡単に口にする。「そりゃ、結婚するって聞いた瞬間逆ギレして陛下につつかかろうとすれば、早々に追い出されますよー」とローレンはまたあつげらかんとした口調で痛いところを突いてくる。短気な所は殿下のマイナスポイントだから、直してくださいねー。フォロー大変なんですよーというローレンの愚痴は聞き流す。

俺は机の上に放り投げた資料の一つを手にとって、パラパラとめくり始めた。

「ルフド帝国つてのは一時期は大陸全土を国土とした歴史があるでしょー？」

「んなの七百年も前の話だろ」

資料をめくれば、ルフド帝国のその歴史の変遷などが記されていた。

ルフド帝国。

大陸にある国の中で最も古い歴史を持ち、一般にその歴史は千三百年以上ともいわれている。現存している正式な記録をみても建国してから千年以上は経過している。

大陸全土を支配下においた七百年前が最盛期。国土は長い年月をかけて徐々に減っているが、今も大陸の強国の一つとして強い影響力を有している。

「そのおかげで帝国の文化や言語が大陸全土に広がって、今でもルフド語は大陸共通語の一つとして絶賛大活躍中ですね」

「アー、うちもルフド語圏だな」

「ルフド語もう大忙しですねー」

ローレンは自分の机の資料を1つ手にとって、何か探しながら会話を続ける。

「つまり、てつとり早く言うと、ルフド帝国つてのは大陸全土に文化や言語を教えてあげた、ルフド帝国が伝播したからこそ大陸各国の繁栄があるんだ感謝してよね。って上から目線がすこーしある国家なんで、自国民以外とはあんまり親しくない風潮が強いんです」

「……それは、ルフド皇室も然りか？」

「然りです。帝国の皇族は血筋を最も重要視するようですね。皇室の血に他の家の血を混ぜたくないと同時に、皇室の血が他の家に混ざることにも相当嫌がるはずですよ。ちよつと古い資料ですけど、直系筋の皇族の子女は同じ皇族が、帝国内でも高位に位置する一部の貴族としか結婚してません。他国人と皇族が結婚した例はこの資料以外でも確認できませんでした」

「ここです、ここ。」と手に持っていた資料を俺に見せてくる。そこには五代から三代ほど前のルフド皇室の家系図が綴られていた。確かめてみるとローレンの言うとおり、直系筋と思われる皇族の配

偶者のほとんどが皇族から選ばれているようだった。

ルフト帝国がこの資料の時代と同じ伝統を続けているなら、現在の正妃もかなり直系筋に近い皇族だろう。

「ヴァイオレット第六皇女は確か、現ルフト帝国皇帝と正妃の唯一の子供だったな。」

「ルフト帝国皇帝の子女の中で、最も『高貴な血筋』をもつ皇女つてやつですねー。」

「血統至上主義の帝国が自ら今まで拘りつづけてた伝統を破って、他国に皇女の婚姻を提案したか……………」

長き歴史をもつゆえか、大陸内の国家で排他的な面が強い言われているルフト帝国が自ら禁を破る。

そうまでしてでも、今回の同盟を成立とアクロス王国との婚姻による強固な関係強化を望んでいる。

経済力や軍事力では引けを取らないが、それでもアクロスは新興国である。その新興国相手に今まで沈黙を貫いてきたルフト帝国がギリギリまで譲歩してきたのだ。

「そこまでの帝国側のメンツを潰せませんよね。これは同盟を結ぶ以上、婚姻も飲まざるを得ません。」

「……………アクロス王国側もそれ相応の相手じゃねえと、帝国の顔に泥塗るわなあ」

ただ、ヴァイオレット皇女を引き取ればいいという訳にはいかない。譲歩してきたルフト帝国側にアクロス王国も誠心誠意こたえなければ亀裂の多いままで同盟成立となり、その亀裂が後々厄介事にもなりかねない。

「で、次期王位継承者である殿下の出番つてわけですねー。」



幸い殿下には婚約者も愛妾もいません」

一夫多妻制を取る帝国とは異なり、わが国は建前上は一夫一妻制をしている。王には、俺の母上である王妃マリアンヌが嫁いでいる。王の兄弟筋や先々代の王の傍流筋などの王族では明らかに釣り合わない。

ルフト帝国第六皇女ヴァイオレットに相手として妥当なのがアクロス王国内で俺一人という結果をいとも簡単に導き出すことが出来る。

「ローレン、こりゃあ、回避はかなり難しいなあ……っ！……！」

自慢の金髪なんか気にもせずガリガリと右手で頭をかき、無駄に大きく作られている机の上に両足を投げ出し声を荒げて話す俺に、ローレンがビクツと小さく肩をゆらした。

能天気話していたローレンの顔からトレードマークの間抜けな笑顔が消え去り、眉をしかめ苦しそうな顔もちで話しかけてきた。

「殿下はそりゃ、自分中心に物事考えがちだし、短気でキレやすいし政務もさばりがちで遊びほうけてたりするけど。でも、誰よりも王国の民の平穏や安心、繁栄を願ってる方っての俺知ってます」

ローレンはそれでいても顔を俺から反らすことなく、話し続ける。

「この同盟が成立すれば、どれだけ国民の暮らしに良い影響をもたらすか殿下はちゃんと理解してますよね。だから、同盟成立のためにどうしても婚姻が必要なことなら、殿下は最終的に婚姻を納得するって確信しつつ、殿下の逃げ道塞ぐように回りくどい言い方しました……」

「ああ、もうキレイさっぱり逃げ道が見つかんねえよ……っ！ ハッ、

有難いことにな」

「ルフド帝国との同盟が成立すれば、アクロス王国の基盤はさらに確固なものになる。殿下が次代の王となる時に、それは大きな助けになるはずです。殿下がその双肩に背負う負担を少しでも軽くするのが、俺やフレデリックの殿下の部下としての役目。国を想う殿下が望む国ための礎の作るのが仕事ですから」

ローレンはそこまで言うと、自身の机の上に積み上がった書類をいくつか手に取り、頭を下げどこかへ行こうとするが、扉の取っ手に手を触れようとした瞬間、もう一度こちらを見た。

「……殿下、俺は貴方の家臣です。でも、友人としては殿下が心底嫌がってる婚姻なんて今すぐにも白紙に戻してしまいたいですよ。俺も、フレデリックも。貴方の傷つく姿をみたくない。そう、思ってるんです。でも、友人としてそれが出来なくて、本当に、本当にすみません……」

それだけいうと、ローレンは執務室から出ていってしまった。

「クソッッ！！！」

ガンッ！！ と大きい音が執務室に木霊する。

思い切り蹴っ飛ばした机の上にあった資料や書類が、床に宙を舞って散らばった。

どうしても煮えくりかえった腹を押さえることができず、もう一度全身の力をこめて、机を蹴った。

ガンッ！！ メキッ…と机の脚に亀裂が入った音が聞こえたが、俺にはどうでもいいことだった。

ローレンの最後の言葉が胸に刺さる。

あいつらは俺を支える家臣として、同盟を成立させて国家の礎を作ろうとしてる。

俺は王国の王子として、王国の民の繁栄につながる同盟のためにはその条件としての婚姻を飲むしかない。

今日は朝からついていない。

見たくもない夢を見て、

降ってほしくもない初雪が降って、

したくもない婚姻から逃れられそうにないことを知った。

畜生、畜生。

### 第3話「帝国皇女の王都入り」

あれから雪が積もり本格的な冬將軍が到来し、やがて穏やかな風と共に春が訪れた。

アクロス王国とルフド帝国の同盟の証としての俺とルフド帝国皇女の婚姻は、両国の国境線である南の山脈の雪がある程度解ける春に執り行われることが取り決められ、ついに今日、帝国からやって来た帝国皇女の一団がアクロス王国の王都・リッテンゼルクへとたどり着いた。

数台の馬車が列をなし王宮の城門へと続く大通りをゆっくりと進む。馬車の周囲を、鎧を纏った数十人の兵士たちが固めていた。

一目見れば、先頭を進んでいる馬車が他の馬車に比べ、群を抜いて豪華絢爛な装飾を施されていることがわかる。窓の縁には金で惜し気もなく使われ、馬車全体が帝国で至上の色である濃紫で塗装されている。扉のやや中央から下の部分には双頭の龍が盾を守るように配される紋章が描かれてる。記憶が正しければ、盾は『大陸の守護』を、双頭の龍は『知恵を与える者』を意味していたはず。この大陸を支配し文化を広めた歴史をそのまま表したかのようなルフド帝国の紋章だ。

その馬車の中に、俺の（ものすごく不本意だか）婚約者であるルフド帝国第六皇女ヴァイオレット・ルフドが乗っているのだろう。

「ついに皇女様のご到着ー」

「上々の反響のようだ」

「『こんにちは、ウエルカム俺たちの国へ！』って感じの大喝采が聞こえますね。いやはや、わが国の方々は友好的な人が多いですねー」

「相変わらず適当な喋り方をするよね、ローレンって」

「ほっといってください。フレデリックの気障な口調よりはマシだし

よう」

王宮内にある俺の私室。そこに併設されている小さめのバルコニーから、俺とフレデリック、ローレンの三人は、ルフト帝国から遙々やって来た帝国皇女の一行を見降ろしていた。

王のお膝元である王都は、小高い丘の上にそびえ立つ王宮を正面としてそこから城下が扇形に広がっている。王宮の東側と北側に沿って小さな森があるのだが、森全てが王家の直轄地という名の自然保護区となっているためだ。最も、小さな森を抜けた先にも城下街は広がってはいるが、王宮からは木々が邪魔になり見ることは出来ない。

「思ってたより人が集まったかもね。遠目からだからはつきりとは言えないけど、ここまでたどり着くのはまだまだかな」

「皇女の出迎えを目的に国中から王都に人が雪崩れ込んで来ましたから。彼女は未来の国母ですし、世にも珍しい黒い御髪と瞳を持つ美貌の姫つてもっぱらの噂です。これを機会に目に焼き付けておきたいと思うのが心情ですよー」

「明らかに後者が動機づけだよな」

「あはは。野次馬根性まる出しなところも愛すべき我らの国民性じゃないですか？」

「確かに」

フレデリックとローレンは携帯できる小型の双眼鏡で皇女が乗っているであろう馬車とその周囲を眺めながら、軽い口調で談笑している。二人とは少し離れたところに居る俺は会話に参加する気力もなかった。

肉眼で民衆が溢れかえっている大通りを眺める。

大通りからかなり距離があるというのに、皇女の出迎えのために集まった人々の歓声が俺の耳まではつきりと聞こえてきた。

幾千、幾万もの帝国皇女の到来を喜ぶ人々の声が王都中に響き渡る。

アクロス王国とルフト帝国の同盟は、俺と皇女の婚姻をもって正式に成立する。

王国の民は皇女を歓迎し、少女の背中によりよい国の繁栄を重ね合わせる。

「同盟の証、か。よくいったもんだ」

苦虫を噛むように、誰にも聞かれないほど小さな声で呟く。

両国の結びつきを目に見える形にすることで、こつこつと容易く人々の心は動く

国家にとって重要な同盟が人々に親しみをもって受け入れられるのだから、決して悪い手段ではない。

しかし、人々が笑顔で祝福するほど、皮膚の皮を少しづつ剥ぎ取られるような痛みが俺の中で増していく。

「ハッ、面白くねえな」

今の心境を一言で表すところも簡単に説明できる。

婚姻が同盟成立の上で避けられないことも、国民が皇女を歓迎している現状も。頭の中で理解して納得することができている。出来てはいるが、体中にねっとりとした渦巻く感情は振り払うことは不可能で。

「さて、渦中の姫君はどう感じて居られるんだろうね？　アーサー」

小型の双眼鏡を己の軍服のポケットに仕舞うと、楽しげな様子でフレデリックはバルコニーの手すりに肘をたて顎に手を置いたまま、視線だけこちらに向けて話しかけてきた。

「俺が知るか」

渦中の姫君とやらに、俺はこれといって関心も興味も抱いていない。

「未来の伴侶に対する気遣いというものが、君にはまるでないようだね。女性の心中をお察しして、さり気なく不安を取り除いて差し上げるのが紳士たる者の務めだろうに」

「俺は紳士つて柄でもねえだろーが」

「まあ、ガサツな君には無粋な話だったかもしれないけどさ」

「……そおかよ」

普段なら此処でフレデリックの暴言に突っかかる所だが、今は適当に流しておく。

「熱烈な国民からのラブコールにドン引きしてないといいですけどねー」

ローレンも双眼鏡で覗き見ることに飽きたようで、先ほどの味気ない俺の返事にとってかわるように会話に入ってきた。

「さて、どうだろう？ ルフド皇室には気位が高い人が多いと聞く。我らの国民の好意を素直に受けとめてくださる姫君か否か。こればかりは実際にお会いしてみないとわからない」

フレデリックは社交界きつてのプレイボーイで、よくこういった噂話を耳にする機会があるらしく話題に出すことがしばしば見受けられる。また噂話か、とローレンが肩を落とした。

社交界の噂といっても千差万別だ。

ルフド帝国の後宮には千人の女が一人の皇帝ために仕えている、隣国のウィル王国の王族は見目があまりにも美しいため雪の妖精に愛されている、などといった妙齡の貴族令嬢が好みそうなおとぎ話や男と女の話から、国の存亡にそのもの関わるような機密情報のまで範囲は広い。

と言っても、大抵は貴族令嬢が小鳥のように囁き合う程度の噂しか転がっていないので、俺もローレンも社交界から出る噂は、フレデリックほど重要視してはいない。

「噂なんて不確かなものを信じるのもどうかと思いますよー？」

ローレンはため息をついて、フレデリックに意見する。

「煙のない所に火は立たないっていうだろう？」

「……まあ、そうですね」

「でも、噂ってのは大抵尾ひれがついてたりするからなあ」と小さい声でブツブツ文句を言うローレンの隣で、「いやいや令嬢の話も案外バカには出来ないもんさ」とフレデリックが続ける。

一旦、令嬢というキーワードが出てしまうと、フレデリックの恋愛談義は止まらない。いい年して初心なローレンはその手の話は苦手なようで、顔をこれでもかと真っ赤にして、必死に両耳を手で押さえて聞かないようにしている。

ギヤーギヤー騒ぐ二人を横目に、俺は懷から銀の懷中時計を取り出して時間を確認する。

丁度、時計の針は13時を指していた。

パチンと懷中時計の蓋をしまえば、蓋に刻まれている模様が嫌でも目に入ってくる。

2対の羽根を持つ獅子を基調としたアクロス王家の紋章。こめられた意味は、「強さ」。



「 どうでもいいだろ、そんなこと。」

フレデリックとローレンの会話を打ち切るように声をかけ、懐中時計を懐へと戻すと、俺はバルコニー備え付けの木の椅子から腰を挙げる。

「謁見の準備とやらで、そろそろエリザ達がここに来る。」

今日は王族と側近の家臣、極一部の有力貴族しか集まらないが、国王夫妻への謁見という名の元、帝国皇女の正式な顔見せが行われる。

普段は動きやすさを重視して軍服を模した動作重視の装飾の少ない服を着ている俺だが、正式な謁見である以上それなりの格好をしなければならない。その準備のために俺付きの侍女であるエリザ達が13時頃に、俺の私室に来る予定なのだ。

…………… かたっ 苦しい服は苦手なんだがな。

「えっ？ もうそんな時間ですか？ お昼休みついでの覗き見でしたけど、夢中になりすぎましたねー。せっかく小型の双眼鏡まで持つて殿下の部屋まできたのに！ 馬車の窓が小さすぎて、皇女様のお顔拝見が出来ませんでした……。ううー、誰よりも先に黒い髪と瞳を持つお姫様を見てみたかったのになあ」

「ローレンってばアクロスで一番のミスターなんじゃないの？」

しょぼんと頂垂れているローレンを見て、フレデリックがケラケラと笑っている。

俺はバルコニーから部屋に戻る前に、一瞬、もう1度大通りのほうへと視線をやった。

ふと、フレデリックの言葉を思い出す。

『さて、渦中の姫君はどう感じて居られるんだろうね?』

王都リッテンゼルクは緑に恵まれた花の都。

春の息吹に誘われるように、色彩鮮やかな花が街のいたる所に見受けられる。街から遠くの平野を眺めてみれば、青々とした若葉がはるか彼方まで広がって、目の前には真新しい黄緑の絨毯がずっとずっと続いているような錯覚にとらわれる。

皇女に一目会おうと国中から王都へと集まった幾万もの人々が彼女の来訪を祝福している。

皆の両手には、双頭の龍が盾を守るように配されているフルド皇室の紋章の旗と、2対の羽根を持つ獅子を基調としたアクロス王家の紋章の旗が、空に高く掲げていることだろう。

王都を取り巻く何もかもが、フルド帝国第六皇女ヴァイオレットを歓迎しているかのようだ。

中心にいるであろう皇女は、いま、何を感じているのだろうか。

そんな素朴な疑問を抱いたが、すぐに記憶の彼方へと消え去った。どれほど国民に歓迎されようが、俺と帝国皇女にとってこの結婚は政略結婚でしかない。

自分の自由意思は反映されない。

「面倒くせえな、マジで」

外のこれ以上ないほどの活気とは裏腹に、俺の心は泥沼に沈みこんだまま。

## 第4話「休息」

王国に着いた日から2週間後、姫さまとアーサー王子の結婚式が行われるとのことだった。一か月にも及んだ長旅は幼い姫さまにとって、とても過酷だっただろうから、しばらくの間休息をとるといい、という王国側の配慮があったからだ。

私たち姫さま付きの侍女たちは、王国宮廷の侍女を一手に取りまとめているエリザ侍女長から直々に、王国の侍女として立派にお勤めを果たせるように、様々なことを叩き込まれている最中だ。王国独自のマナーや宮廷に仕える者の心構えはもちろん、王族たちの部屋から、庭園、調理室や浴場など、広大すぎる宮廷の構造まで。学ばなければならぬことは山のようにある。帝国との勝手の違いに戸惑いと驚きの日々が、ここ1週間続いていた。

姫さまにも休む時間はほとんどないようだ。今日も姫さまが部屋での朝食をすまされたあと、宮廷専属のお針子たちがやってきて姫さまに婚礼用のドレスを着つけ、ドレスに一寸の狂いもないかと確認をしていた。午後は毎日、大臣のターナーさまが姫さまのご指導のためにやってくる。王国式の礼儀作法や、結婚式当日の段取りなど、姫さまにも覚えなければならぬことが山のようにある。

「休息」とは名ばかりで、忙しさに時間を追われ、想像以上の速さで結婚式の日が近づいてくる。

今日も昼食から少し時間がたった後、いつものように、大臣のターナーさまが姫さまの部屋を訪ねてきた。

ターナーさまはいつもニコニコとした表情していて、物腰も柔らかく穏やかそうな雰囲気をしているから、潰れたようなしやがれた声はあまりにもミスマッチすぎる。

「ヴァイオレット様、ご気分はどうですか？」

姫さまに近づきながら、ターナーさまが話しかけた。

「ええ、変わりありません。」

昼食後の休憩中に読んでいた本を閉じ、ターナー様につられるようにあいさつを交わす。

「実は、今日はご報告したいことがありまして。」

「そうなの？ いったいなにかしら？」

「私、ターナー・ヘイゼル。正式にヴァイオレット様の教育係になることとなりました。」

「本当に？ ターナーが私の教育係に？」

姫さまは信じられないと思ったのか、ターナーさまに聞き返していた。

「私はレディに嘘はつかない主義ですの。」

ターナーさまは腕を胸の前にやり、軽く頭を下げた。洗練された動きに、しゃがれた声とのギャップがなんとも艶めかしいと思ってしまった。白髪が交じり初老に差し掛かった年齢でもこの色気、若いころはそれこそ社交界の花だったに違いない。ターナーさまのご子息の一人、フレデリック・ヘイゼルさまは、女性関係が華やかで、兄弟の中で一番ターナーさまの血を濃く引いているともっぱら評判だ。

「お上手なのね。貴方が教育係になってくれるなんて嬉しいわ。」

「ヴァイオレット様がそのように言ってくださるとは。これほど光栄なことはありません。」

「まあ。本当にお上手。」

くすくすと、手を口にあげて小さく姫さまが笑っている。

「失礼します、お茶をお持ちしました。」

お話しがひと段落したようなので、紅茶をいれたティーセットを持っていく。

「ありがとうございます、ルル。」

「ありがとうございます。」

「いえ、とんでもありません。」

ターナーさまも姫さまの向かえの椅子に座り、2人ともカップを手  
に取った。私は調理師に頼んで甘さを控えめにしてもらったクツキ  
ーをテーブルに添えた。

「いつものことながら、このお嬢さんの入れる紅茶は本当に美味し  
い。」

「そうでしょう？ ルルが入れるお茶はどれも美味しいのよ、ターナ  
ー。」

姫さまは自慢げにターナーさまに話しかける。

「左様ですな。」

お茶を入れて一番うれしいことは、ありがとうとか、おいしいと言  
ってもらえた時だ。入れてよかったと心がほんわりと暖かくなる。

ただ、姫さまの好きな緑茶を出せないことが残念でならない。王国  
では「お茶」といえば、一般的に紅茶のことを指すらしい。帝国と  
は異なり、緑茶を飲む習慣はなく、紅茶のほかにも貴婦人にはハー  
ブティなどが好まれるそうだ。姫さまは緑茶を好んで飲まれる。姫  
さまとの秘密のお茶会でも、いつも緑茶をだしていた。どうしたら、  
緑茶の茶葉が手に入るか、それがここ最近の私の悩みでもある。

「本当においしいわ、ルル。」

姫さまが笑うと、花のように可愛らしい。姫さまが笑うと、また私  
の心はほんわりとあたたまる。

「ヴァイオレット様、このお茶を飲み終えたら、今日の勉強をは  
じめましょう。」

「ええ、わかったわ。」

また、姫さまに忙しい時間が戻ってくる。私にも言えることだ。  
「それでは、失礼いたします。」

これから、エリザ侍女長の講義がはじまる。エリザ侍女長は王子の  
アーサー王子の世話係を務めているほど有能な人で、いつもピシッ  
と背筋が伸びている侍女の鏡ともいえる女性だが、これまた中々手  
厳しい方で、頭には鬼の角があるんじゃないかと思ってしまう時が

ある。今日も手厳しくしごかれるかと思うと、少し気分が落ち込んでしまう。

「ルル。」

姫さまに呼び止められる。

「はい、何でございましょう?」

「貴女もがんばってね。私もがんばるわ。」

落ちた気分も、姫さまの一言で消えてしまっから不思議なものだ。

「ありがとうございます。」

頭を下げて部屋を出る。ポケットから懐中時計を出して時間を確認する。講義の時間には十分間に合いそうだ。

アクロス王国にきて、私の心の不安は日が経つにつれて小さくなっていく。帝国にいたとき、姫さまの表情はとてもしかった。「無口で、無愛想な姫君」と後宮の中ではそのように言われていた。本当に、私だけしか、姫さまの感情を目にしたことがなかったのだ。それでも、控え目でいつも悲しさを漂わせていて、そんな姫さまを見ていると、いつも心が縛られるように心が痛かった。

異国の地は姫さまを暖かく受け入れているように感じる。あの国王夫妻への謁見の時こそ、姫さまは仮面をかぶっていただろう。けれど、今は心からこの生活を楽しんでいるように見える。親しみをもてる王妃さま、温和でやさしいターナーさま。宮廷に仕える者たちも、みな、姫さまを卑下することなく接している。姫さまは年相応な子供らしい一面を、少しずつ、私以外の人にも出すようになっていく。

今日の午前、婚礼用のドレスを着ていた姫さまは、ほんとうに美しかった。花嫁だけに許される、汚れのない、純白。まさに姫さまに相応しい色。気高く気丈で、何者にも汚されることのない強さをもつ姫さま。外面の美しさもそうだが、内面の美しさがあるからこそ、姫さまは誰よりも凜とした美しさをお持ちなのだ。

きっと、アーサー王子も見られるに違いない。

太陽のように眩しい金髪に、海のような碧眼を持つアーサー王子と黒曜石のように人を惹きつけてやまない漆黒の髪と瞳を持つ姫さま。

相反する美しさを持つお二人が並ぶ光景は、誰にも想像することはできない。きっとだれもが息をのみ、ただただ見とれることしか出来ないだろうと思う。

アーサー王子といえば、謁見の時のことを思い出す。あの視線は何だったんだろう。誰も姫さまに見とれていたのに、王子だけが、姫さまの後ろに控えていた私のほうを見ていたように感じた。何か粗相をしてしまったのかと焦ったが、これといったおとがめもないので、気のせいだったんだろう。

きっと、何もかもうまくいく。そんな予感がした。

まだまだこれから始まるけれど、少しずつ、姫さまの小さな手では抱えきれないほどの幸せがやってくる。そう信じずにはいられない。

ここは本当に賑やかで優しくて暖かい。大丈夫、姫さまの将来はあの夜の星空のように輝く。

#### 第4話「休息」（後書き）

一か月以上更新できませんでした…。なるべく定期的に更新でいたらいいなと思います。

ターナーさんはもう年も年なので、大臣などの役職を後任に任せて、政治の表舞台からは引退するようです。

ここまで読んでくださってありがとうございます。



## 第5話「結婚式」 1

「今日みたいな空を、『雲ひとつない青空』って言うんだろっね。」

窓辺に肘を置き、視線を外へと向けていたフレデリックが話しかけてきた。俺はつられるように、窓のほうへと顔を向けた。たしかに、まれにみる青空が広がっている。今日も、外は俺の心情を察することはなかったようだ。

「それが、どうした。」

あまり、会話をする気分じゃなかった。

「……………暗いな。」

「小さくて、よく聞こえない。」

返事をするのも、なんだか気だるい。

「暗いって言うてんの。」

憎たらしい青空から、フレデリックへと視線を戻した。フレデリックは眉をひそめ、文句タラタラな顔をして、こちらを睨んでいた。珍しいこともあるもんだ。いつもはヘラヘラと笑って過ごして、本性を隠しているというのに。

「当たり前だろう。誰かこんな日に明るく振舞えるか！」

結局、俺が無力だと痛感させられただけだ。どんなに抵抗しようとしても、王にとっては赤子の腕を折るようなものだったんだろう。今日、ついに結婚式の当日になってしまった。俺が結婚だって？

冗談じゃない。どうして、世の中は俺の考えとは反対方向に流れてしまうのか。

「君は、今日の主役なんだ。いい加減、バカでも気づこうよ。」

フレデリックはなお、俺をその目で射抜いている。どうして、お前まで俺を攻め立てる。

「……………それくらい、わかってる。」

わかってるんだよ、俺だってな。

「だから、こうして大人しくしてるだろう。」

「いいや、アーサー。君は全くわかってない。」

フレデリックが窓辺から勢いよくこちらへと向かってきた。いったい、こいつは何を言いたいのか。突如として額に衝撃が与えられる。

ベシッ！

「……痛っ！」

18歳にもなつて、でこピンはないだろう。

「君に手加減は無用だと思つてね。」

フレデリックはにっこりと笑う。

「お前なっ……！」

ただのでこピンと侮つてはいけない。本人のふざけた雰囲気とはあまりに似ても似つかないが、一応、フレデリックは軍人なのだ。けつこう攻撃力があつて、まだ額がジンジンとしびれている。

「ったく、何がしたいんだ？」

本当に、わけがわからない。長い付き合いだが、こいつの行動はいつまでたつても読めやしない。

「さつきよりはマシな顔かな。」

「は？」

「さつきまで、いかにも「俺は不幸だっ！」って言いたげな顔してた。」

「……そうか？」

「そうだよ。この僕がせつかくアーサーをリラックスさせようと思つて話をふつても、ふてくされた返事しか返つてこなかったしね。」

「……否定は、できないかもしれない。」

指摘されたように、俺の表情も態度も好ましいものではなかっただろつ。

「俺はお前のように器用な人間じゃないんだ。」

自分の感情を誤魔化したり、隠したり、繕つたりするのは苦手だ。

俺はいつだって自分自身の感じがまま正直に生きてきた人間だ。

「アーサーが不器用すぎるのさ。」

いつの間にかフレデリックは普段の軽いノリに戻っていて、ケラケラと笑っている。

「君はいつだって自分に正直すぎる。……まあ、そこが君の取柄でもあるからね。僕はアーサーのそういう所は好きだな。」

「そういうことを言うな、フレデリック。気色悪い。」

なんだか、俺もいつものように返事を返している。フレデリックのペースに引きづり込まれたようだ。

「なんとか、いつものアーサーにはなつたみたいだね?」

「世話をかけたな。」

少しばかり、気分が晴れたように感じる。

「礼を言つとく、一応な。」

「王子殿下の憂いが少しでも消え去つたのなら、このフレデリック・ヘイゼル嬉しゅうございます。」

フレデリックは無理やり低い声を出して、腕を胸の前にやり軽く頭を下げた。よく知っている人物と重なる口調と仕草。

「なんだ、それは。ターナーのマネか?」

自然と、頬が緩む。

「あれ?似てない?」

「いや、完璧だ。さすがは親子というところだな。」

二人してくだらないことを話して、ゲラゲラと笑う。普段と変わらないやりとりだ。気を遣わせてしまって、本当に申し訳ないと思つた。やり方は少し変わっているが、フレデリックはフレデリックなりに、俺を慰めてくれたのだ。フレデリックの明るさには、助けられていばかりだ。

「アーサーが今回の結婚を嫌悪していることは、宮廷にいる者のほとんどが知っていることさ。」

「あれだけ騒げばな。」

俺の結婚に関する俺と王との対立は、宮廷中を巻き込んだも過言ではない。侍女が結婚式の衣装の寸法を測ろうとしただけで逃亡し、結婚を白紙にするよう王に直談判するために、王の政務室まで無断に入り込んだこともある。実は絶食ストライキを試みようとしたことがあったのだが、侍女長のエリザに泣いて懇願されてしまい実行する前に挫折した。

「昨日までは、君と接する人間は王国側の人間だけだった。だから大して問題もなかった。」

「……そうだな。」

何だかんだいって、宮廷の者たちは俺に甘いのだろう。俺が逃亡しようとしたり、結婚話への抗議をしようとしたりすると、全力で止めに入っただが、不評を流したり、国の政治に関わっている問題なのに、表立って俺を罵倒する者もいなかった。

「けど、今日の結婚式には帝国側の人間だって列席するし、なににより、国民へのお披露目だってあるんだ。」

フレデリックは肩を落とし、君は本当にそういうにしても疎いよねと付け加えた。余計なお世話だ。

「ヴァイオレット皇女は、帝国の秘蔵っ子なんだ。新興国に嫁に出して喜ばれこそすれ、無礼な態度をとられる筋合いはないっていう考えさ。」

俺が憮然としたままで結婚式にでたら、帝国側の者たちに不評をかってしまい、それはアクロス王国の名にも傷がつくことになるだろう。

「俺の対応1つで、戦争にだってなるってことだな。」

ちょっと考えればわかることだろうに、俺は自分のことで手一杯で気づこうともしなかった。……だから、俺はバカだと言われるんだな。

「大げさに言ってしまうば、そうなるね。……それと、もう1つ、君がわかってないことがある。」

もう1つ、俺がわかっていないこと？

「アーサー、僕だって君に意地悪で言うわけじゃない。」

フレデリックは再び窓辺のほうへと歩き出し、窓の外へと視線をずらした。窓の枠に腰かけると、俺と視線をあわさないよう話しているように見える。

「王国の民は、お披露目の場で、君にダイアン王子の影を重ねる。絶対だ。」

「っでだよ！！俺はダイアン兄様とは違うだろ！！」

思わず大きな声で返答してしまった。グリグリと頭の中をむりやりかき混ぜられた感覚に陥った。

「ダイアン殿下も、美しい金髪と碧眼をお持ちだった。顔立ちだって君と瓜二つ。……重ねるな、というほうが難しいよ。」

フレデリックはまだ、俺と視線を合わせようとはしない。こいつだって、好き好んで俺に対して言ってるんじゃないだ。

「俺は、兄様にはなれない。」

なりたくもない。だから、結婚だつてしたくない。

「誰だって、それくらいわかってるよ。ただ、君たち兄弟は似ているから、国民は悲観的になってしまうのさ。」

フレデリックはしばらく黙った後、こちらを振り返って言葉をつづけた。

「君が今日、笑って入れば、国民は安心するよ。きっと。」

王家の人間として、国民に憂いを感じさせてはならない。フレデリックはそう俺に言いたいのだろう。

「君は『王国』に対しても、好感を持っていないようだけど、『王国の民』が嫌いなわけじゃないだろう？」

フレデリックの口角が片側だけつり上がる。にやりとした表情が、何とも彼らしいと思った。本当に、こいつは俺のことを知っている、というよりは、見透かされているな。

「ああ。」

お前の言う通りだ。

コンコンツと、部屋の扉の向こうからノックの音が聞こえる。

「時間のようだね。」

フレデリックはそう言つと、重い腰を上げた。

「精々、恥をかかないように頑張つて。」

振り返ることもせず右手を軽く上げ、部屋に入ってきたエリザとすれ違うようにして出て行つた。

「ヘイゼルのお坊ちゃんがいましてたんですね。」

エリザは普段のメイド服姿ではなく、きつちりと襟の詰まっている深い藍色のドレスを身にまとっている。侍女長という高い地位にある彼女は、結婚式の列席を認められていた。

「説教をしにきたようだ。」

「つい先ほどまでより、幾分か良いお顔になれているのは、そういう理由ですか。」

エリザは目を細め、控え目にほほ笑んだ。50を過ぎた彼女は、俺のたった一言ですべてを把握してしまったようだ。伊達に、年は食つていないな。

「エリザまで、そう言うか。」

「申し上げたくもありません。今朝の着付けの際も、アーサー殿下を取り押さえるのに苦労しましたから。」

「結局、お前の勝ちだっただろ。」

エリザはそうなることを予測して、はじめから腕っ節が自慢の近衛兵を10人も従えて着付けへとやってきた。フレデリック程じゃないが、エリザも中々くえない奴だ。

「あまり、雑談している時間はございません。もう、準備はすべて整っております。」

部屋の置き時計の針が、もうすぐ結婚式の時刻をさそうとしていた。……わかつた。」

とうとう、結婚式がはじまる。俺にとってはこの上なく苦痛な時間の始まりだ。

「私も列席しなくてはなりませんので、お先に式場へ参ります。扉の向こうに案内役の侍女が待機しておりますで、よろしくお願い致します。」

エリザはしっかりと腰を軸にして、深く礼をした。いつ見ても、エリザの仕草は規律に完璧にそっている。扉の前でエリザは再び頭を下げ、部屋を出た。

右手を額にかぶせる。フレデリックにかまされたでこぴんの衝撃は、すでに和らいでいたが、その衝撃を思い出して気合いを入れた。

王の言葉を借りるなら、「くだらない。」

俺が結婚したとして、いったい何があるというのか。人間は時に unnecessary 感情を抱くらしい。人はそれを、恋とか愛とか、「好き」、「愛してる」と表現する。そんな不確かなものに、どんなに有能な人間も振り回され、自滅していつてしまう。自分が崩壊していくことなど、俺は断じて許さない。

くだらない。

結婚式は今日、行われる。俺は十字架の前で、偽りの誓いをたてなければならぬ。フレデリックの言う通りだ。「王国」がとうなるうと構わないが、俺の勝手なわがままで「国民」をみすみす不幸へと誘うことはできない。今日のところは、おとなしく笑っていればいいのだ。

そろそろ行くか。ずっと腰かけていたベットから、俺はゆっくりと立ち上がった。窓辺へと視線を移す。やはり、向こう側には、雲ひとつない青空がどこまでも続いている。最後に溜息をひとつ吐き、式場へ向かうため扉の取っ手に手をかけた。

扉をあけると、あの時の侍女が佇んでいた。





## 第5話「結婚式」 1（後書き）

久しぶりの更新です。

先日、プロローグを第1話の冒頭へと移動させました。

以前のプロローグの場所には、新たに登場人物の紹介をのせています。

結婚式のお話、自分で思っていたより長くなりそうです……。  
気長にお付き合いください。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1116d/>

---

初恋葬送

2011年2月3日14時45分発行